

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第705号 平成26年3月17日

さとり世代（1）

「さとり世代」というのは、不思議な言葉です。初めてこの言葉を耳にした時の違和感は、今も残ったままです。

「さとり」の意味について、広辞苑では

- ・つまびらかに知る。物事の道理を明らかに知る
- ・心の迷いを去って真理を体得する

等とありますが、私を含め日々の暮らしに追われている人間にとって「心の迷いを去って真理を体得する」といった心境に達する事は、殆ど不可能に近いと思います。

幕末から明治にかけて活躍した人に山岡鉄舟という人がいますが、西郷隆盛がこの山岡鉄舟について、「金もいらぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、その様な人でなければ天下の偉業は成し遂げられぬ」と賞賛したという話は有名で、俗世にいながら悟った人といわしめるとすれば、山岡鉄舟の様な人の事を指すのかも知れません。

それでは、現在世間で使用されている「さとり世代」という言葉は、どのような意味なのでしょう。

一般には1980年代半ば以降に生まれた「ゆとり世代」の事をいい換えたもので、堅実で高望みをしない現代の若者気質を表す言葉として使用されています。

この「さとり世代」について、「さとり世代の消費とホンネ」という本を書かれた牛窪恵氏は「能力はある。ヤル気がないわけでもない。賢く、効率主義で、何より周囲との同調性やバランスを重んじる。ただ賢さが高じて『ここではこのぐらいが、ちょうどいい』『だって〇〇は、どうせこんなもの』とすぐ悟るから、あえて無理もしない。クールに見えるのだ。」と述べています。

この牛窪氏の一文を目にした時、私は「諦念」という言葉を思い起こしました。この「諦念」というのは「道理をさとる心。真理を諦観する心」を意味しますが、もう一つ「あきらめの気持ち」という意味も持っています。

つまり、「〇〇は、どうせこんなもの」と「さとり世代」がしばしば口にする言葉は、現状を冷静に分析した結果ともいえますが、同時に諦めの気持ちがいわせているともいえるでしょう。それからすると、彼ら世代は「さとり世代」というより「悟っているつもり世代」というべきで、むしろ「諦め世代」というべきかも知れません。それでは、この様な世代が誕生したのは、何故なのでしょう。

（塾頭：吉田 洋一）